

2021年春、千葉県のKさん(女性)から届いたメール、「夫がいない現実の中で、これから先、生きていく気持ちになれない。...こんなに辛いのに、何で一生懸命生きなくちゃならないのかなって思ってしまって。」Kさんはまだ40代、夫の一周忌の翌日のメールでした。子どものいない彼女は一人ぼっちになりました。

私はなんとか彼女に返信のメールを送らなければと思ったのですが、返す言葉がどうしても思いつかない。「生きていけばいいこともある」とか「あなたが悲しんでばかりいると夫が成仏できない」とか「日にち薬といって時間が解決してくれる」などという月並みな言葉が何の意味も持たないことは分かっていました。なぜなら、私自身が妻を亡くして1年足らずで、彼女と全く同じように闇の中を彷徨っていたから。彼女とは日本グリーンケアセンターが杉並で実施している死別遺族を「支える会」で知り合いました。

何でもいいからすぐに返信すればよかったのかもしれませんが、何を書いても空疎な文

章にしかならない気がしてどうしようもなかった。やっとの思いで返信したのは1か月以上経ってから。何とも情けない話です。

シェークスピアの言葉に「誰でも悲しみは我慢できる。それが他人のものならば」というのがあります。どんなに良心的な人でも、他人の本当の悲しみを共有することはできません。伴侶を亡くして独りになるということがどういうことか、自分が経験して初めてわかります。立ち直るには何年もかかる、いや立ち直れない人もいます。

今、私は毎月1回高崎で、大切な人を亡くして悲嘆(グリーフ)に暮れている人たちの「分かち合いの会」という小さな集いを行っています。そういう集いは、東京にはいくつもあるけれど、群馬県にはまだほとんどありません。核家族化が進み、死別で独り暮らしになってしまう人も多くなりました。

どんなに社会が進歩しても、誰もが避けることのできない死別の苦しみ、それを独りで抱え込まないで、話したり聴いたりする場が必要だと思うのです。

今後の主な予定

2月 2日(金) 13時～	スタジオ楽書会
2月 9日(金) 14時～	原発と自然エネルギー研究部会
2月11日(日) 11時～15時	子どもの権利委員会創立30周年記念行事 「子どもまんなかフェスタ」(前橋プラザ元気21「にぎわいホール」)
2月12日(月) 13時～	ぐんま教育のつどい2024(県勤労福祉センター) テーマは「部活動の地域移行」
2月16日(金) 13時～	スタジオ楽書会
3月 1日(金) 13時～	スタジオ楽書会
3月 8日(金) 14時～	原発と自然エネルギー研究部会
3月10日(日)	第13回群馬さよなら原発アクション(高崎城址公園)
3月15日(金) 13時～	スタジオ楽書会
3月26日(火) 12時～	教育相談部会

※自由画ひろば寺子屋(旧3色パステル画寺子屋)は4月開始予定です。